

日本人英語学習者のための音韻に関する LFC (1)

Phonological LFC for Japanese learners of English (1)

今仲昌宏 (人文学部国際言語文化学科)

Masahiro IMANAKA (Department of International Studies in Language and Culture)

1. はじめに

国際語としての英語の登場以来、日本の英語発音モデルに徐々に変化が生じてきている。これまでは長らく米英の GA、RP といった英語の母語話者 (Native Speaker、以下 NS) の発音がモデルとされてきた。しかし NS の発音を基本的学習モデルとしてきたが故に NS 発音に対するある種のコンプレックスが学習者に常に付きまとうという側面があった。このような状況が長く続いてきたものの、現在は多くの入門者用英和辞典にはカタカナ発音表記が普及するなどの現象からも明らかなように、これまでの NS 発音を模範とする傾向に対し、歯止めがかかりつつあるようである。しかし発音は音声という目標として明確で捉えやすいものであるがゆえに、指導する側が NS モデル以外にどのような発音を提示すべきか、具体的音声として他の選択肢を提示することが非常に困難であるために、理論上の議論は別にして長い間具体案が俎上に載ることはほとんどなかったといつてよい。

本稿では ELF (English as a Lingua Franca) の立場から入門期の日本人学習者にとってどのようなモデルが望ましいかを具体的に音素、超分節音素等に沿って考察する。新しいモデルの構想にあたっては、まず学習者の第一言語 (母語) と目標言語との音韻上の相違について周到に検討を重ね、合理的な指導に向けて日本語からの転移の問題等を含んだ上での対応が求められる。その上に立って学習者の習得レベルの相違によっても指導の内容や手順などをも考慮する必要が出てこよう。また Lingua Franca Core (共通語としての英語の中核) (以下 LFC) の指導にあたり、指導者・学習者の発音モデルに対する意識についても検討する。

2. 拡張圏の英語モデル

Kachru (1992) が唱導する三つの英語使用サークル (three circles of English) の外円圏 (Outer Circle) における ESL (English as a Second Language) モデルには基本的にそれぞれの国や地域で歴史的に確立した型 (institutionalized model) がある。例えばインドやフィリピンにみられる、それぞれの特徴ある英語である。いわゆる NS モデルではない、誰が聞いてもすぐに Indian English や Filipino English とわかる性格を有している。一方、日本のように純粋に外国語として英語を学習する国や地域は拡張圏 (Expanding Circle) に属する。日本については、日本語の影響を受けた日本語的英語があるとされているが、拡張圏では国内に必ずしも明確な形で英語が常用されるコミュニティ等があるわけではない。従ってぼんやりとした日本人特有の英語発音のイメージは確かに存在するが、目標とすべき日本人学習者向けのモデルとして明確な型のようなものは見当たらない。そのため日本で行なわれてきた英語教育は、伝統的に民族英語の米 (GA)・英 (RP) のモデルを手本としてきたことにはある意味で必然性があった。

外円圏内では、すでに領域内に皆が従う英語モデルが社会や文化に根付いているため、必然

的に内円圏(**Inner Circle**)からの影響はほとんど受けない。しかし拡張圏の場合は既存の英語教材やテレビ・ラジオ・映画などから流入する英語は大半が内円圏内で制作されたものである。そのため拡張圏の領域内では自然に内円圏の英語モデルが基準にならざるを得ない面がある(Nelson 2011: 85-86)。

拡張圏における英語話者数が現在のように拡大する以前であれば、NS を基にしたモデルを学習することに異論が顕在化することはなかったと思われるが、英語の国際化の深化により英語使用人口が飛躍的に増加するに伴って英語使用者間の習熟度の幅も広がった。この間拡張圏に属する国々では長い時間をかけてGAやRPを目標に学習してもすべての学習者がNSレベルに達するわけでもなく、必ずしも非英語母語話者(**Non-Native Speaker**、以下NNS)にとって高すぎる学習目標を掲げ続ける必要はないことが徐々に明確になってきた。

日本の英語教育ではこれまでNS、特に英米のモデルが戦前から戦後にかけて中心に据えられてきた(江利川 2006; 伊村 2003)。長い期間にわたり行なわれてきた英語教育の伝統を即座に変えることはそう簡単ではない。同時に既述したように発音指導においては、音韻目録等のようにあまりに具体性の高い学習項目について、ある程度優先順位をつけることはできても、単純に線引きをすることによって項目の軽重を示すことは非常に困難である。さらにここでいう学習者といっても第一言語は様々であることから、母語に存在しない音素を学習上優先するとすると、言語ごとに優先順位が変動するために、個別言語ごとの対応を取るか、それとも最大公約数という方法論を取るかも問題となる。

World Englishes の考え方からすると、NSモデルを唯一のモデルとする必要はなく、もっと緩やかな形で学習可能なモデルを設定する必要がある。英語教育においてこれまでの歴史的経緯から国内的にはNSモデルを推す一定の層があると考えられる。これは特に基準受容(**norm-accepting**)という観点から多くの日本人はNSモデルを重視する傾向があったといえる。NNSの学習者にとってNSモデルを基準とすることにはいくつか問題点が存在する(注1)。

大半の日本人学習者にとっても、習得に相当な時間をかけねばならないようなNSモデルではなく、多言語・多文化に対応するという観点から、拡張圏でも英語のNNSモデルを設定し、学習目標にすることの方がより重要であるといわざるを得ない状況になった。Jenkins (2000)が提案する音韻に関する核(**phonological core**)、ないしはLFCはこうした状況を解決する上で一つの道筋を示したものといってよい。

Kachru (1992)は **World Englishes** の英語発音について、ELTにおいて二つの抜本的変革(**paradigm shift**)が必要だとしている。第一には発音の研究と教育に関するもの、第二に英語使用ならびに英語使用者の社会言語学上の現実に対する理解を掲げ、この二つは分かつことができない関係にある。この二点について、変革が起きるとするならば研究と教育へのアプローチの仕方も自動的に変えざるを得なくなる。Jenkins (2000: 198)はELFの立場からすると、上記の変化が可能になると下記の四分野で劇的な変化が起きるとしている。

- 1) 教員養成における発音指導
- 2) 発音の評価
- 3) NNS 教員の発音のステータス

4) 母語話者が ELF の発音を学習する必要性

3. モデル発音の変更

NS モデルを長期間にわたり基準としてきた教員や学習者にとって、意識改革は非常に困難であることが予想される。2で述べたように、そもそも NS モデルを外国語発音目標の基準とすること自体は他に目ざすべき目標がない状況においては、ある意味で自然なことではある。英語が現在のように世界の共通語の地位を占めていなければ、NS が最も望ましいモデルであることに議論の余地はないが、現状ではこうした認識を覆して L2 学習者の発音が外国人学習者にとってはより重要なモデルであると考えを改めることが求められている。すなわちこれまで NS 発音より一段低い位置にあると考えられてきた NNS モデルに対する劣等意識の払拭も必要となる(Jenkins 2000: 211)。つまり発音モデルの評価は NS モデルにどれだけ近接しているかが、習熟度の差を示す尺度であった。それと同時に、英語の正統性の見地からの序列感が存在するからである(鈴木 1985: 142)。この意識の払拭は容易ではないが、いずれはこの考え方を是として英語教育全体が移行することが必要であろう。

ELF における発音指導は NS と NNS ではどちらがより適格性が高いかという点について、Widdowson (1994b)によると、前者は第一言語として英語を習得しており、英語発音に関してはいわば特権的な立場にある。意識的な努力なしに母語話者としての発音を身に付けた人が、外国語としての英語を身に付けようとしている学習者にとって優れた教師だといえるであろうか、という疑問を投げかけている。例えば日本語を母語とする学習者は英語発音に取り組む際に、日本語発音の習慣から抜け出すことはなかなか難しい。この点で同様の経験を積んだ日本人の教師の方が指導上はより適格な立場にある。恐らく NS 教員には NNS 学習者がどのような問題から英語らしい発音に困難を感じているのかが理解できない可能性が高い(Jenkins 2000: 217)。

外国人学習者が英語を学習する目的は NS と同じレベルの運用能力を身に付けるのでない場合は、NS モデルが適切であるとはいえず、指導の際に英語教師に求められるのは必ずしも NS レベルの発音や運用能力ではない。教師の教育力・指導力にある程度の比重を置くとすれば、やはり NS モデルの必要はなく、現実的でもない。教師自身が英語学習を通じて、母語からの影響による転移の問題など様々な点で学習途上において自ら苦労した経験が、同様の課題を抱える学習者への指導にどれほど役に立つかは、十分に理解できることである。一方こうした実体験が伴わない NS 教師には学習者側が共感するような指導は困難であるといえる(Seidlhofer 1999: 238)。もちろん NS であっても学習者の L1 の音韻体系について十分な知識や深い経験等がある場合はそれなりに指導には効果があると考えられるが、通常はそうした条件や経験が備わっている NS 教師がどれだけ存在するであろうか。従って極論すれば NS が貢献できる面としては、母語話者モデルとしてインフォーマント(informant)以上のものはほとんど提供できない(Jenkins 2000: 221)。

一方、学習者が NS モデルを目標とせず、(a)プロダクション面で NS に理解してもらうことを想定する必要がなければ、(b)国際的な場面で理解してもらえる NNS レベルの発音で十分だということになる。拡張圏では(b)のレベルの学習者層が圧倒的多数を占めることは容易に想像できる。このように判断すればハードルが相当程度下がることになる。こうした状況の中、前提となるのは、NS モデルが NNS モデルよりも高いステータスをもつことはないという明確な

認識が必要だということである。さらに NNS 学習者が NS 話者を相手に話す際には自己の発音に劣等意識を感じざるを得ない面があるが、NNS 話者相手の場合には、そうした意識をもたないで済むという点が大いなので、授業等でそうした問題点を学習者に対し意識付けを行なうことも大切である。

4. LFC の設定

上述したモデルのコアとなる音韻単位の最少必要項目のリストの作成にあたっては、これまでのように NS 話者に設定を任せるべきではない(Jenkins 2000: 224)。あくまで NNS 話者同士がしかも可能な限り異なる母語を持つ英語話者同士がお互いの英語でのコミュニケーションを通じて相手が理解できる最小限の音韻単位(分節音素、超分節音素)等を観察し、それをリスト作成に反映してゆくことである。NS は当然のことながらすべての音韻項目を不自由なく調音できる。また母語であるために NS 音声に対して思い入れの度合いが強く、母語に対する愛着等も手伝って NNS の発音は大半が不完全なものと感じられ、最小限の理解可能な範囲を自ら探求することが困難となる。つまり NS は自己基準からは離れられない立場にあるのはある意味で仕方のない面がある。従って、上述したように基準とすべきは NS 対 NS や NS 対 NNS ではなく、NNS 対 NNS によるコミュニケーション場面での理解を基本的拠り所とすべきだという点である。こうした点からほとんどの NS は LFC の受け入れに困難を感じるであろうが、NNS は問題なく受容することができるであろう。

別の観点からすると、NS、LFC それぞれの英語音声の調音可能範囲を重ねて概念的に比較すると図 1 のようになる。NS はこの LFC に歩み寄る必要が出てきている。英語が国際化していなければ、英語教育はおしなべて英米の標準モデルを模範とすればよかったかもしれないが、国際化により、既に全世界の共有財産となってしまったため、NS の思い通りにはならない存在となってしまったのである(注2)。NS にとっては NNS の発音は NS のものより明瞭度が低くなるのは当然のことであるが、これを苦勞しながらも理解する努力が求められる立場になってしまったということである。

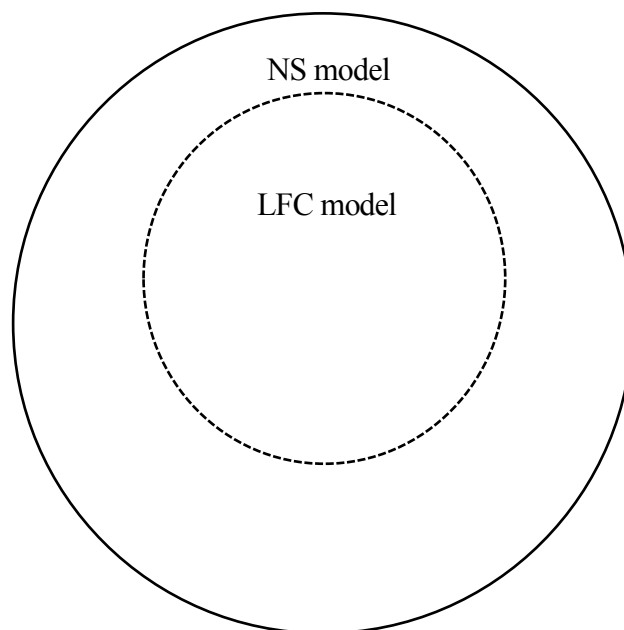


図 1

5. LFC と教育体制

Wells (2008: 101-2)は英語学習に際し、そもそも EFL、ESL、EIL のような枠組みの必要性に疑問を投げかけている。学習者の動機づけ、学習意欲、音韻・統語・語彙など様々な点で習得上個人差があるのは当然であり、授業において上記の区分がどれほどの意味をもつのかという点も問うている。外国語教育に関しては、既習者を指導の対象とする場合、習熟度別にクラス分けした上で授業を実施するのは必要な措置であろうが、初学者の場合は学習者側や対象クラスに特別な学習条件が存在しない限り、基本的に同じレベルで指導を開始するのが正攻法だと考えられる。その際、指導内容は優先順位に従って、基本から応用へと進むのが望ましく、指導項目も易から難へ、概略的な枠組みから細部へと進めるように教材等を配列すべきであろう。

発音に関して ELF の観点からは、具体的にはまず NNS に対応する基本を身に付けることから開始するのが望ましいが、この時点で既述したように NS とのコミュニケーションを想定しないことが大切である。しかしその後は学習者個人の求める到達レベルや目的などに応じて、志望者は少ないであろうが必要なならば NS レベルへの習得へと接続できる柔軟な教育態勢が整備されているのが望ましい。つまり学習者の要望に沿って発展性の余地が用意されているほうがよい。学習上の条件としては常により多くの学習者が望む項目を基本として裾野に設定し、習得レベルが上がるにつれて徐々に学習者数が少なくなってゆくと同時に専門的に細分化してゆく形へとピラミッド的に進めるように構成されるような課程であることが重要であろう。

6. 教室内・外での学習

コミュニケーションの上達に必要な技能は、教室内でどこまで指導が可能かという課題がある。特に音声については現実の場面での経験を積み重ねることによってしか身に付かない範囲の技能がある。教室内の指導において、より効果が上がる部分とそうでないものとに分けて、前者はもっぱら言語学的側面からの学習を指し、後者のパラ言語学(paralinguistics)の範疇に入る非言語的行動などは経験を積み重ねながら時間をかけて習熟してゆくことを事前に想定しておく必要がある。その上で学習者には学習過程の見取り図を提示して、将来の展望を見据えた学習へと導くことが望まれる。

具体的にいえば、教室内では音素目録を含む語・句・文レベルの音声指導を中心に行ない、音調等の超分節音素等については、概略についての紹介程度に留めておき、現実のコミュニケーション場面で経験することによって確実に身に付けるように促すことがスムーズな受け渡しになるであろう。

学習者が英語圏に留学・移住するような機会がある場合、本人が望みさえすれば英語圏内で NS との長期間にわたるコミュニケーションを通じて、さらには NS のありのままの英語(authentic English)の環境の中で、徐々に NS レベルの運用能力を身に付けてゆくことも可能になるであろう。LFC とは学習者のニーズに応じて様々な発展可能な応用力が身に付いてゆくような基本でありエッセンスだと考えればよい(Jenkins 2000: 136)。学習者が教室外で英語体験する場合、様々な場面が想定可能である。英語圏での NS とのコミュニケーションや非英語圏での NNS とのコミュニケーションなど状況や必要に応じて受容能力と発表能力を独自に作り上げ

てゆけることが大切である。

注)

- 1) ELF 環境においては、NS モデルは逆に必要がないとする意見がある。国際的に英語が使用される状況の中、NS モデルがそれと認識されるのは基本的には発音であるという事実からすれば、L2 の学習者が母語(L1)発音の転移が出ないように努力する必要は必ずしもなく、いわゆる母語からの転移(transfer)による訛りがあっても一定レベルの条件さえ整えればコミュニケーション上大きな支障はないことが多い。従って NS モデルが ELF の環境では理解に必要な不可欠なものとはならない(Jenkins 2000:207)。英語の国際化によって、英語は NS の専有物ではなくなったといえ、外国人の話す分かりにくい英語を理解する努力、いい換えると、NS が NNS の発音や独特の英語に対して歩み寄る努力が必須となったといえる。
- 2) 鈴木はこれを柔道の国際化になぞらえて説明している。柔道は 1964 年の東京オリンピックで正式種目となって以来国際化を果たし、世界の人々が共有するスポーツとして国際柔道連盟がルール変更等の決定権をもつようになった。そのためカラー柔道着の採用などの例に代表されるように、あらゆる問題が多数決で決定されるようになり、日本柔道連盟の意見は一参加国としてのレベルになった。従って柔道発祥の地としての特権的立場を失ってしまった。そのため、いつまでも「お家芸」だからといって日本人選手の金メダル獲得を当然視したりするべきではないのである。イギリスはサッカーやテニスなどの発祥地であるが、同国人が選手にプレッシャーをかけているというような話は寡聞にして聞くことはない(鈴木 1985: 136-139)。

参考文献

- Bex, T. and Watts, R.J. (eds.) (1999) *Standard English. The Widening Debate*. London: Routledge.
- Bolton, K. (2006) Varieties of World Englishes. In Kachru, B.B., Kachru, Y. and Nelson, C.L. (eds.), (1999) 289-312.
- Dziubalska-Kolaczyk, K. and Przedlacka, J. (2008) *English Pronunciation Models: A Changing Scene*. Bern: Peter Lang AG.
- Jenkins, J. (2000) *The Phonology of English as an International Language*. Oxford University Press.
- Kachru, B. (1978) Toward structuring code-mixing: an Indian perspective. *International Journal of the Sociology of Language* 16: 27-46.
- Kachru, B. (1986) *The Alchemy of English: The Spread, Functions, and Models of Non-native Englishes*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.
- Kachru, B. (1992) *The Other Tongue: English Across Cultures*. 2nd Edition. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.
- Kachru, B.B., Kachru, Y. and Nelson, C.L. (eds.) (2006) *The Handbook of World Englishes*, Malden, MA: Blackwell.
- Milroy, L. (1999) 'Standard English and language ideology in Britain and the United States.' In Bex, T. and Watts, R.J. (eds.) (1999) 173-206.
- Nelson, C.L. (2011) *Intelligibility in World Englishes*. New York: Routledge.
- Pierce, J. (1971) Culture, diffusion and Japlish. *Linguistics* 76: 45-58.
- Reed, M. and Levis, J.M. (eds.) (2015) *The Handbook of English Pronunciation*. Oxford: John Wiley &

Sons, Inc.

Sabbage, T. and Sabbage, S. (eds.) (1995) *Proceedings of the 4th International NELLE Conference*. Hamburg: NELLE. 1.10-1.13.

Seidlhofer, B. (1999) Double standards: teacher education in the Expanding Circle. *World Englishes* 18/2: 233-245.

Walker, R. and Zoghbor, W. (2015) The Pronunciation of English as a Lingua Franca. In Reed, M. and Levis, J.M. (eds.) (2015) 433-453.

Walker, R. (2010) *Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca*. Oxford University Press.

Wells, J.C. (2008) Goals in Teaching English Pronunciation. In Dziubalska-Kołodziejczyk, K. and Przedlacka, J. (2008) 101-110.

Widdowson, H.G. (1994b) Pragmatics and the pedagogic competence of language teachers. In Sabbage, T. and Sabbage, S. (eds.) (1995).

江利川春雄 (2006) 『近代日本の英語科教育史』 東信堂

伊村元道 (2003) 『日本の英語教育 200 年』 大修館書店

鈴木孝夫 (1985) 『武器としてのことば』 新潮社